

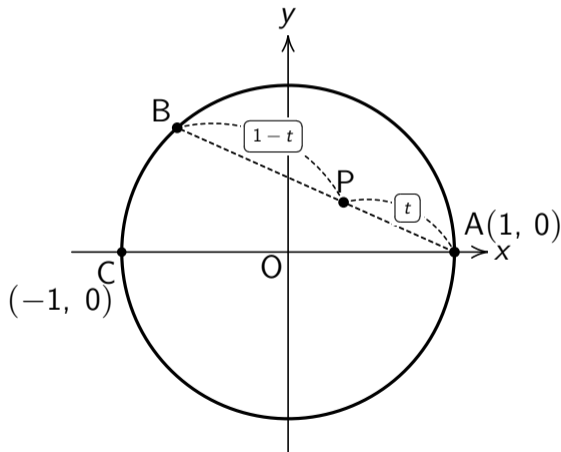
共通のベクトルを考える.

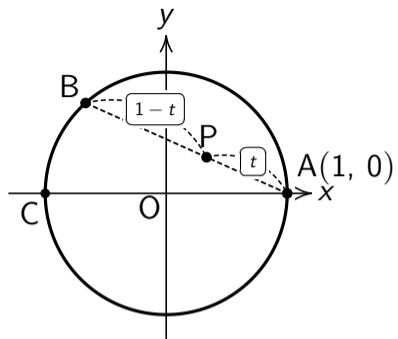
共テのベクトルを考える.

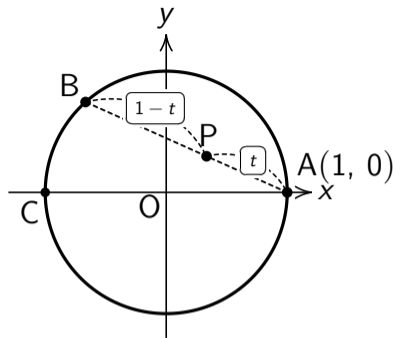
平面上の点 O を中心とする半径 1 の円周上に, 3 点 A, B, C があり, $\vec{OA} \cdot \vec{OB} = -\frac{2}{3}$
および $\vec{OC} = -\vec{OA}$ を満たすとする. t を $0 < t < 1$ を満たす実数とし, 線分 AB を
 $t : (1 - t)$ に内分する点を P とする. また, 直線 OP 上に点 Q をとる.

平面上の点 O を中心とする半径 1 の円周上に、 3 点 A, B, C があり、 $\vec{OA} \cdot \vec{OB} = -\frac{2}{3}$
および $\vec{OC} = -\vec{OA}$ を満たすとする。 t を $0 < t < 1$ を満たす実数とし、線分 AB を
 $t : (1 - t)$ に内分する点を P とする。また、直線 OP 上に点 Q をとる。

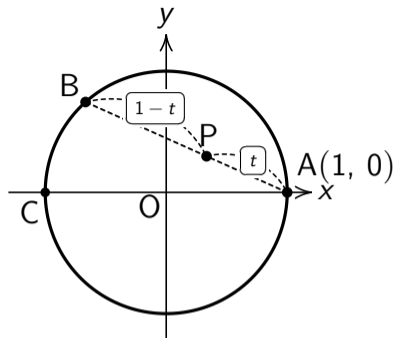
平面上の点 O を中心とする半径 1 の円周上に、 3 点 A, B, C があり、 $\vec{OA} \cdot \vec{OB} = -\frac{2}{3}$ および $\vec{OC} = -\vec{OA}$ を満たすとする。 t を $0 < t < 1$ を満たす実数とし、線分 AB を $t : (1 - t)$ に内分する点を P とする。 また、直線 OP 上に点 Q をとる。







(1) $\cos \angle AOB = \frac{\boxed{\text{アイ}}}{\boxed{\text{ウ}}}$ である.

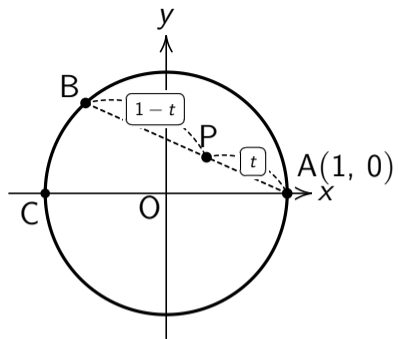


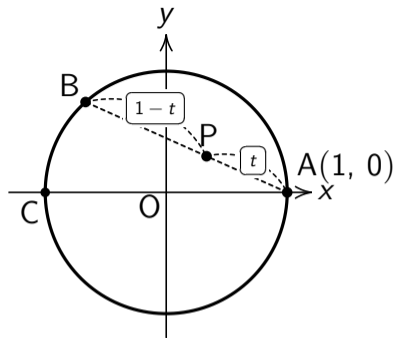
(1) $\cos \angle AOB = \frac{\boxed{\text{アイ}}}{\boxed{\text{ウ}}}$ である.

また、実数 k を用いて、 $\vec{OQ} = k\vec{OP}$ と表せる. したがって

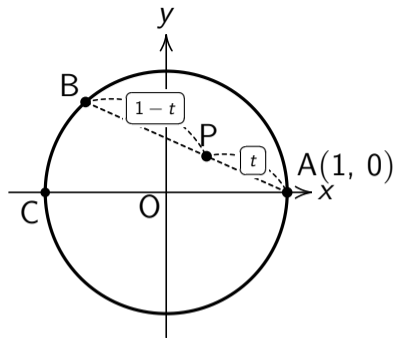
$$\vec{OQ} = \boxed{\text{エ}} \vec{OA} + \boxed{\text{オ}} \vec{OB}, \quad \dots\dots\dots \textcircled{1}$$

$$\vec{CQ} = \boxed{\text{カ}} \vec{OA} + \boxed{\text{キ}} \vec{OB}.$$





\vec{OA} と \vec{OP} が垂直となるのは、 $t = \frac{\boxed{\text{ク}}}{\boxed{\text{ケ}}}$ のときである。

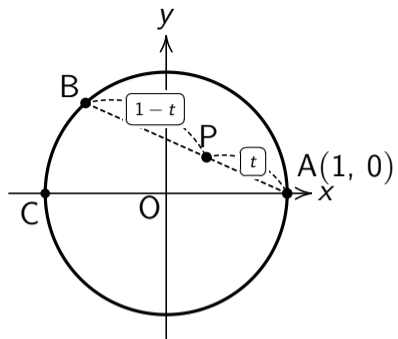


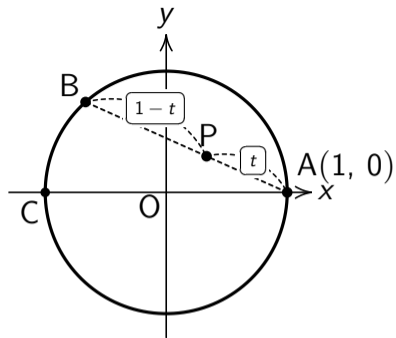
\vec{OA} と \vec{OP} が垂直となるのは、 $t = \frac{\boxed{\text{ク}}}{\boxed{\text{ケ}}}$ のときである。 $\vec{OA} \cdot \vec{OP} = 0$ のとき。

$$\vec{OA} \cdot \vec{OP} = \vec{OA} \cdot \left\{ (1-t)\vec{OA} + t\vec{OB} \right\} = (1-t) - \frac{2}{3}t = 1 - \frac{5}{3}t = 0$$

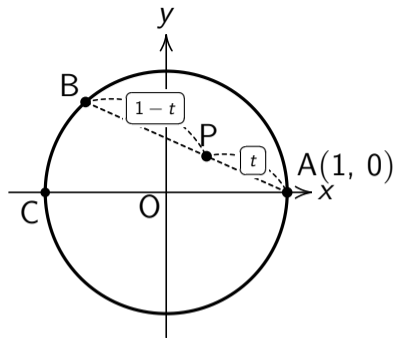
より、 $t = \frac{\boxed{3}}{\boxed{5}}$.

(1) は終わり





以下、 $t \neq \frac{3}{5}$ とし、 $\angle OCQ$ が直角であるとする。

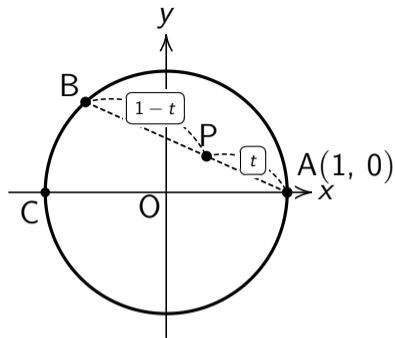


以下、 $t \neq \frac{3}{5}$ とし、 $\angle OCQ$ が直角であるとする。

$\angle OCQ$ が直角であることにより、(1) の k は

$$k = \frac{\boxed{\text{コ}}}{\boxed{\text{サ}} t - \boxed{\text{シ}}} \dots\dots\dots \textcircled{2}$$

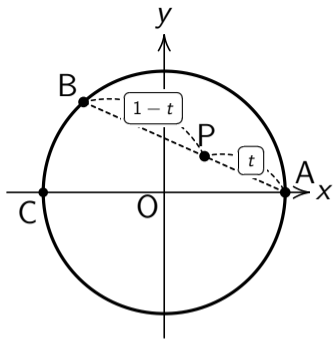
となることがわかる。



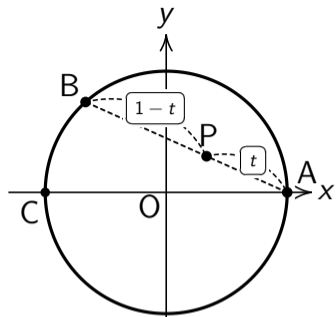
$\angle OCQ$ が直角であることにより, $\vec{OC} \cdot \vec{CQ} = 0$.

$$\vec{OC} \cdot \vec{CQ} = -\vec{OA} \cdot \left\{ (k - kt + 1)\vec{OA} + kt\vec{OB} \right\} = (kt - k - 1) + \frac{2}{3}kt = 0.$$

$$k(5t - 3) = 3 \text{ より, (1) の } k \text{ は } k = \frac{\boxed{3}}{\boxed{5}t - \boxed{3}}. \quad \dots \textcircled{2}$$

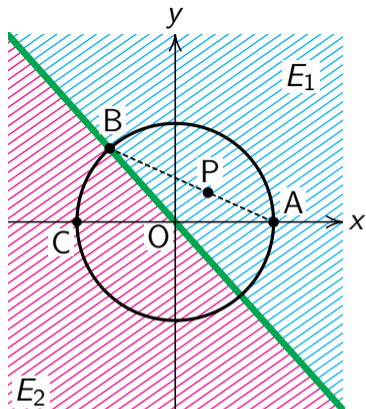
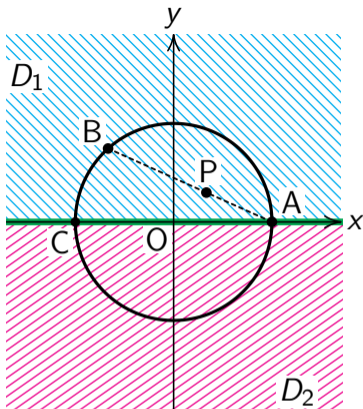
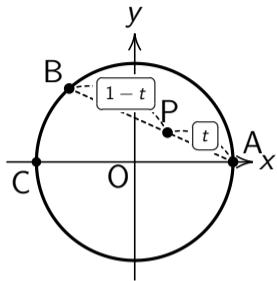


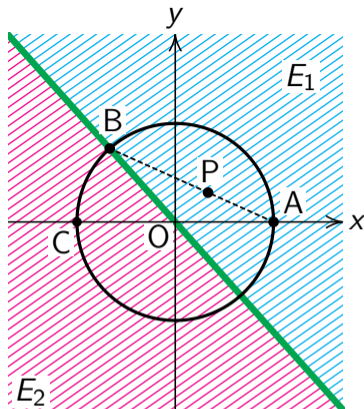
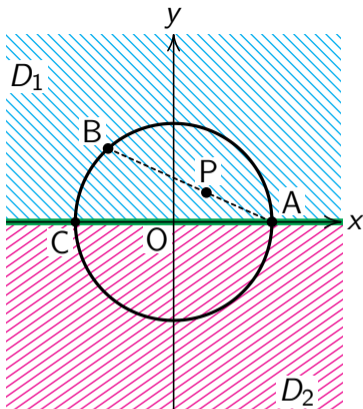
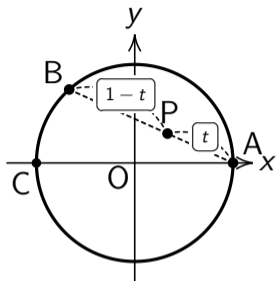
以下, $t \neq \frac{3}{5}$ とし, $\angle OCQ$ が直角であるとする.



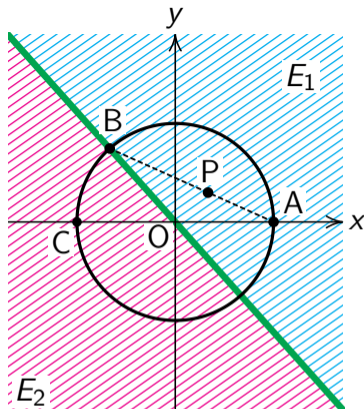
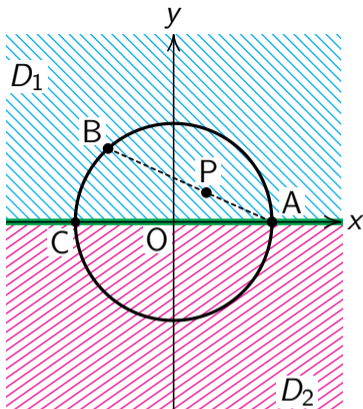
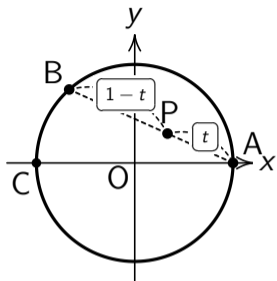
以下、 $t \neq \frac{3}{5}$ とし、 $\angle OCQ$ が直角であるとする。

- $0 < t < \frac{\text{ク}}{\text{ケ}}$ ならば、点 Q は **ス** .
- $\frac{\text{ク}}{\text{ケ}} < t < 1$ ならば、点 Q は **セ** .





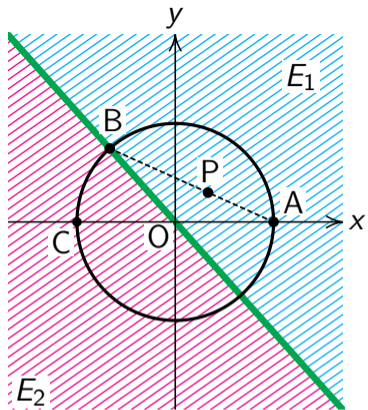
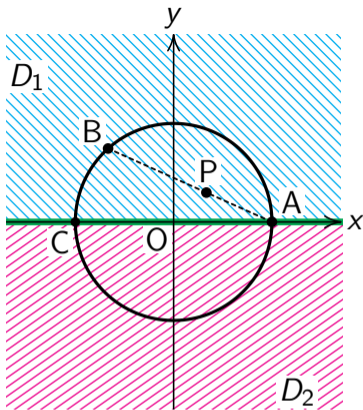
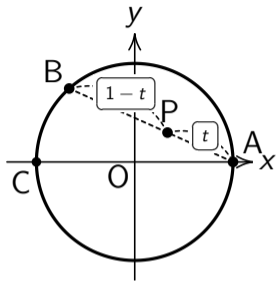
- $0 < t < \frac{\text{ク}}{\text{ケ}}$ ならば、点Qは .
- $\frac{\text{ク}}{\text{ケ}} < t < 1$ ならば、点Qは .



- $0 < t < \frac{\text{ク}}{\text{ケ}}$ ならば、点Qは .

$$\vec{OQ} = k\vec{OP} = \frac{3}{5t-3}\vec{OP}.$$

- $\frac{\text{ク}}{\text{ケ}} < t < 1$ ならば、点Qは .



• $0 < t < \frac{\text{ク}}{\text{ケ}}$ ならば、点 Q は .

$$\vec{OQ} = k\vec{OP} = \frac{3}{5t-3}\vec{OP}.$$

• $\frac{\text{ク}}{\text{ケ}} < t < 1$ ならば、点 Q は .

(2) は終わり!

(3) 太郎さんと花子さんは、点Pの位置と $|\overrightarrow{OQ}|$ の関係について考えている。 $t = \frac{1}{2}$ のとき、①と②により、 $|\overrightarrow{OQ}| = \sqrt{\square}$ とわかる。

太郎： $t \neq \frac{1}{2}$ のときにも、 $|\overrightarrow{OQ}| = \sqrt{\square}$ となる場合があるかな。

花子： $|\overrightarrow{OQ}|$ を t を用いて表して、 $|\overrightarrow{OQ}| = \sqrt{\square}$ を満たす t の値について考えればいいと思うよ。

太郎：計算が大変そうだね。

花子：直線OAに関して、 $t = \frac{1}{2}$ のときの点Qと対称な点をRとしたら、
 $|\overrightarrow{OR}| = \sqrt{\square}$ となるよ。

太郎： \overrightarrow{OR} を \overrightarrow{OA} と \overrightarrow{OB} を用いて表すことができれば、 t の値が求められそうだね。

(3) 最後 直線 OA に関して, $t = \frac{1}{2}$ のときの点 Q と対称な点を R とすると

$$\vec{CR} = \boxed{\text{タ}} \vec{CQ} = \boxed{\text{チ}} \vec{OA} + \boxed{\text{ツ}} \vec{OB}$$

となる. $t \neq \frac{1}{2}$ のとき, $|\vec{OQ}| = \sqrt{\boxed{\text{ソ}}}$ となる t の値は $\frac{\boxed{\text{テ}}}{\boxed{\text{ト}}}$ である.

(3) 太郎さんと花子さんは、点Pの位置と $|\vec{OQ}|$ の関係について考えている。 $t = \frac{1}{2}$ のとき、①と②により、 $|\vec{OQ}| = \sqrt{\boxed{\text{ソ}}}$ とわかる。

(3) 太郎さんと花子さんは、点Pの位置と $|\vec{OQ}|$ の関係について考えている。 $t = \frac{1}{2}$

のとき、①と②により、 $|\vec{OQ}| = \sqrt{\boxed{\quad}}$ とわかる。

$t = \frac{1}{2}$ のとき、①より $\vec{OQ} = k \left(\frac{1}{2}\vec{OA} + \frac{1}{2}\vec{OB} \right)$ であり、②より $k = -6$ であるから、

$$\vec{OQ} = -3(\vec{OA} + \vec{OB}).$$

ここで、

$$|\vec{OA} + \vec{OB}|^2 = 1 + 1 + 2 \cdot \left(-\frac{2}{3} \right) = \frac{2}{3} = \frac{6}{9}$$

より、 $|\vec{OA} + \vec{OB}| = \frac{\sqrt{6}}{3}$ であるから、 $|\vec{OQ}| = 3 \cdot \frac{\sqrt{6}}{3} = \sqrt{\boxed{6}}$.

太郎： $t \neq \frac{1}{2}$ のときにも、 $|\overrightarrow{OQ}| = \sqrt{\boxed{6}}$ となる場合があるかな。

花子： $|\overrightarrow{OQ}|$ を t を用いて表して、 $|\overrightarrow{OQ}| = \sqrt{\boxed{6}}$ を満たす t の値について考えればいいと思うよ。

太郎：計算が大変そうだね。

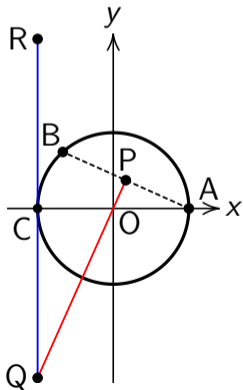
花子：直線 OA に関して、 $t = \frac{1}{2}$ のときの点 Q と対称な点を R としたら、
 $|\overrightarrow{OR}| = \sqrt{\boxed{6}}$ となるよ。

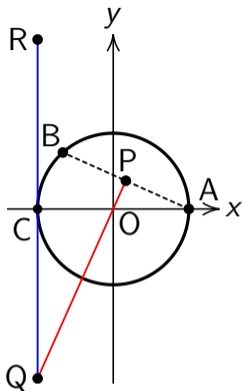
太郎： \overrightarrow{OR} を \overrightarrow{OA} と \overrightarrow{OB} を用いて表すことができれば、 t の値が求められそうだね。

花子：直線 OA に関して、 $t = \frac{1}{2}$ のときの点 Q と対称な点を R としたら、

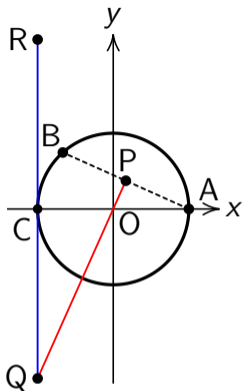
$$|\vec{OR}| = \sqrt{\boxed{6}} \text{ となるよ.}$$

太郎： \vec{OR} を \vec{OA} と \vec{OB} を用いて表すことができれば、 t の値が求められそうだね.

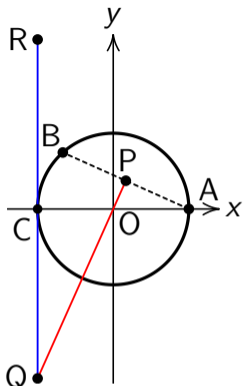




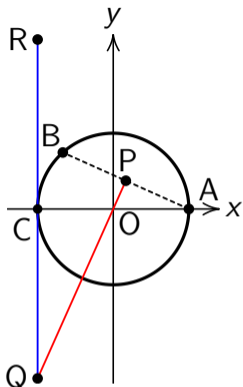
$$\vec{CR} = \boxed{-} \vec{CQ} = -\vec{OA} + 3(\vec{OA} + \vec{OB}) = \boxed{2} \vec{OA} + \boxed{3} \vec{OB}.$$



$$\vec{CR} = \boxed{-} \vec{CQ} = -\vec{OA} + 3(\vec{OA} + \vec{OB}) = \boxed{2} \vec{OA} + \boxed{3} \vec{OB}.$$



t を $\left(\frac{1}{2}\right)$ 以外の値で定めたときの点 Q の位置が点 R の位置と一致するような t を考えればよい.



t を $\left(\frac{1}{2}\right)$ 以外の値で定めたときの点 Q の位置が点 R の位置と一致するような t を考えればよい.

$$k\left\{(1-t)\vec{OA} + t\vec{OB}\right\} = \vec{OR} = \vec{OA} + 3\vec{OB} = 4\left(\frac{\vec{OA} + 3\vec{OB}}{4}\right) \text{ より } k = 4, t = \frac{\boxed{3}}{\boxed{4}}.$$

点Qは直線OP上の点であるから、PがABとORの交点. PやQは t に依存するので、parameterを明記して P_t や Q_t , R_t とするとわかりやすい(R_t は Q_t の x 軸に関する対称点). 要するに、 $R_{\frac{1}{2}}$ と Q_t が一致する t ($\neq \frac{1}{2}$)を求めればよい.

